

ニラ賛歌 Remix

北和真

セーブデータ2

目が覚めるとそこは宇宙だった
星は見上げる必要もなかった
理性が脳に着陸した時、私が最初に感じたことは
地平線が三次元、ということだった
試しにもがいてみたが、手足に風を切るようなそういう感覚はなく
抵抗のない滑らかな動きだった
遅れて息はできるようだ、と気づいた時
突如心の渴きを自覚した
両の足は地を求めている
遺伝子は引力を求めている

私が救助船の第二隔壁を通過したのは
三日 後

筋肉質な肩に私はベランダに干された布団
ブロンドの男は運が良かったなとだけ
透き通るような白い歯を添えて
ラジオはM o o n r i v e rを歌う

月に着いて
私はニラじゃないんだと
彼は言った
記憶もまた

彼もまた
宇宙もまた

港を出るとカビ臭いスラムが広がっていた
真空と大気を隔てるドームは、もはや膜と言ってもいい
それほどに脆く見えた

私の親友（仮）は不揃いのヒゲ

人生はニラみてえなもんさね

奴はそう言った

中途半端なんだそうだ

美味くもないし不味くもない

歯に挟まるけどメニューから消えるのはやだ

欲望の臭いが漂う

酒場

に

F l y m e t o t h e m o o n

私の家だと言われた場所は今にも倒壊しそうなマンションの一室だった
長いこと空けていたらしく、ホコリが床をコーティングしていた
掃除をするために窓をかつぴらいて

とてもとてもきれいな夜空だった

大型プロジェクトの映すそれは私の見た宇宙とは真逆なのだ

へまた、生えてきたね

N o w s a v i n g

ハネムーン

松橋りい奈

ねえダーリン可視だけのものが全てじゃあないわ！　あなたは星が嫌いだけれどシャンプーの中身は変えないけれど地球儀の中にもうつくしい地殻が冷蔵庫の中には眠った私がいともみなしてほしいの月曜日は左利きでいてほしいの偶然美術館で会いたいのうすく切ったトマトをふくんであなたは過ぎ去れば映画のようねあなたはあの日うぶの神父に永遠を誓って恐る恐る手を洗って祈ったでもね私永遠よりもほんとうはうずらを飼いたかったのいずれもきらめくふと白いあどけない愛おしい日あなたの清潔な包帯の匂いとぬるくとぼけた牛乳の味のむずがゆいもどかしい首すじああよく生きる観葉植物くすくすねえそういえばダーリンレモンの綴りはどうだっけ私の駅にあなたが来たならどうしよう性格の悪い歯医者を紹介してもいいんだけどあなたは不揃いな傘立てに困るかしら私が亀になったらどうしようあなたは海にゆらめくビニールになって私を殺すの私の思考が眩しい淡い光にぽつと放り投げられていずれ消えてしまったらどうしようそうならないよう明かりを消してよねえダーリン私は音楽になりたい十一時のドライブで流す賛美歌にでも私は言葉になりたいアメリカの子どもが紡いだはじめの詩にダーリン野球中継をつけてよ靴下を裏返しにしないでつれこまないで大切にしてくれなくてよまらないでまちがわらないでいて浮かれないで私の遺体にも毎日キスをして　落ち着いたら深夜ファミレスでパフェでも食べましょうか　私たち深く素敵でありましょう　ハネムーン先はシンガポール！

張り詰めた世界に立つわたし。剣を持って相手に立ち向かう姿は、世界を救う勇者そのもの。真っ白い服を着て、左手にはグローブをはめて、でっかいマスクを頭にかぶって……ここはどこだっけ。

つん裂くような機械音の中から、微かに聞こえてくる心地の良い声が自分の名前を呼んでいる気がする。そうか自分は英雄なのか。

冷たい鉄の網目を通して見える世界はやけに鮮明で、目の前にいる敵をどうやって倒そうか、ただそれだけを考える。

「よし心臓を突こう」

低速で進む世界が、そう決めた途端急速に動き出す。前に一步踏み出して、自分を加速させる。心臓を狙っていることを悟られないように、まるで相手の右肩を狙うように剣を前に突き出して、相手が剣でそれを払いのけようとした瞬間、今だ！ 素早く心臓へ剣を突き立てる。

一瞬の静寂、それから、それから。

「はい、カット！」

頭の中に鳴り響く鐘の音。あ、夢か。そう考えたのも束の間、顔にしっとりした感触と、いつもより五グラム重い自分の心臓。

今日も拳を握りしめて、フェンシングをする。

花

ソ
ン
シ
ヨ
ウ
イ
ク

花よ 暖かい日に咲け

眩しく咲け

啼鳥の囀りに囲まれて咲け

巡り行く世界がまた息吹く

その始まりの合図を 万物に示せ

花よ 華やかに咲け

そして天覚め 地覚め 人も覚め

名のなき春を迎え

花よ 冷たい日に咲け

清く咲け

凍えた枝を彩って屈強に咲け

蒼白過ぎる雪景色を誇る

凜とする幽香を 行く人に届け

花よ 華やかに咲け

去るものを弔うため

咲け 咲け 乱れ咲け

○

朝焼けに身を隠して現れ

夜霧と共にまた消え

土に落ちた君は

灰と塵になるだけ

艷麗の姿が時間に掻き消され
芬芳も腐臭になり変え
魂すら沸騰する暑さに漂ったのは
深い哀れみだけ

今年は新しい公園を訪ね
そこに新しい花がまた咲いて
去年と同じなのは
花を見ている私だけ

私が見送って
されど私を見送るものは誰
それを知らずに
花はただ咲くだけ

萩原朔太郎「竹」に寄せて

神隠し

後藤宗貞

空間にはエンリヨがありませんので、ご了承ください

そのために私たちは存在し続けるのです

境界線へ行って見たことはありますか？

そこにはたくさんのお白い猫がいますよ

ご存知ですか？ 猫は液体なのです

時間はエンリヨしてくれるので、ぜひお白い猫となってください

あ、ほら！ あの子が右手を上げて手招きしていますよ

招き猫と違って細身の猫ですねカワイイです

エンリヨはできません、空間にはエンリヨがありませんので

飽きることはありませんのでご安心ください

時間はエンリヨしてくれます

戻ることはできません

空間にはエンリヨがありませんので

さあお白い猫となりましょう

私たちはそのお手伝いができます

ああ、死のうとされるのは困ります

お時間はエンリヨしてくれますが、時にはイカリも抱きます

死ぬと魂の分の空間が空いてしまいます

私たちはそこにもお白い猫を与えなければなりません

猫は爪を立ててしまうかもしれません

このままではお時間をもっと引き延ばされてしまいますよ

未来永劫お爪を立てられますよ

だからお白い猫になりましょうお白くてお白くてカワイイカワイイ猫に

とてもお白いカワイイステキプリーティな猫です

瓦解

田中小弓

或る日を境に 何かが発射した
彼女の心のこびとは 花火を目撃した
イヤリングは ピアスに替わり
音楽の好みは ロックに変わり
夕食は 夜食のアイスに代わり
鼻歌交じりに 夜道をふらふら歩く
昨日までのしがらみに 追い詰められた頭はくらくら
不意に 掻き乱された感情はめちやくちや
咄嗟に走ってみたり 叫んでみたり
自己肯定感の低い頭じゃ この世間は辛いことばかり
かつての箱入り娘は 溢れかえる優越感に浸り
泪の乾いた額に薄ら笑いを浮かべ 何を思う
「もう赦して」
そのしなやかな身体は 誰かにとって 幻影となり
潜んだのは 梅雨のじめじめとした 深夜の暗がり

熟れる

野口貫

ころり寝転がった私の側で

障子の隙間から漏れる

柔らかな春の陽射し

その穏やかな道の上を

細かなホコリが列をなし並んで

どこまでも無垢で純粹で

入れ替わり 立ち替わり

日を浴びて

膝立ちになってするりと近寄ると

私を迎え入れてくれた

手のひらを器にそのまま食べてしまえそうな

光の束

閉じた瞼をじんわり照らしながら

その温もりはおでこに染み込んで

右脳をゆっくり

とろけさせ

そのまま 私の半分は死んでいき

鼻先 耳 首筋 肩

というふうに

軟骨から

そうして 私だったものは

日焼けした畳に染み込んで消えた

偽レクイエム

エドアルド・オツキオネーロ

其の一

私は洪水に見舞われた村、アリヤーテへ帰っていた。
ロマネスク様式の、聖ペテロと聖パウロのバシリカ、
そして洗礼堂。新改修された洗礼堂！

「故郷に帰るきみよ」と、私は反省し、
私自身に向き合った「故郷へ帰るきみよ、帰路に恨み抱きながら」

かつては川端にオリーブの木があり、

ニセアカシアの木、

草群。

川はランブロ川で、マンゾーニ風の喚起を、
かねてより崇高なり澄みきった流れ、ギリシャ語を語源とするその名。その
後、工場の時代がやってきた」と言われ、とはいえ、その前に紡績工場の黄
金時代もあった。

私は帰ってきた、二〇四二年一月の洪水に襲われたふるさとへ。
空気はまだ湿っており、粒子状物質で毒に、
樹脂のような匂いが漂う。

防水壁は耐えられず、水に家々、橋が食い荒らされた。
氾濫した川が遊び場を壊し、サッカー場を押し流し、
犬たちは濁り濁った茶色の濁流に攫われて

い

っ

た。

「雨も増水も慣れたもんよ。四〇年前も、二七年も三五年もあったさ。だが、今回はマジで想像を絶してたぜ」
と、一九七三年生まれのエジディオ氏が語る。
家具職人の数少ない生存者として。
すなわち伝統と地元会社を守れ、
などと地方紙の好みによる描かれ癖において。

川と同一平面の村の土地は、今やすっかり水底に沈んでしまった。
その水は三〜四キロにも広がってくる。

やく海拔二三〇メートルで走るムリーニ通り沿いに延び、

モリーノ・フィロ、

モリーノ・レジカ、

カラータ・ブリアンツアの墓地へ

と続く大通りまで。

「三階の窓際からは、

コイヤチャブが見えるだろう」と夢見るのは

八歳のミケーレ。

彼の無意識は鐘楼の上を跨ぎ、ダンススクールの屋根をびよん
びよん跳びながらツホブネという舟に出帆していた、

空へ。

「すべてが水に飲まれちゃった。家具が、
カーグが……。」と、嘆くロザルバ婦人。

可哀想。

数年前なら「一生のための犠牲だった」と言えたはずだ。
ただし、今や何人とも一身投げうたない――
反復される喪失の意識でいえば犠牲は無駄です。
戦後の時代、

北米関税、

縮小された航空空間、

思考停止。

其の二

私はこの草原を歩き出した。川の流れがようやく回復し、そこに広がるのは消耗した草原だった。

まるで「故郷の鎮魂歌」そのものだ、と言われるかもしれない。

郷愁の 膨大な枕元 又は病床。

私は歩みを導く—— 楡の木へ

イラクサへ

色あせたチャイブへ。 むき出しの根っ子。

氾濫は斜面を浸し、斜面は崩れ落ちそうに、落ちた。

落ちてきたラダエツリ家の屋敷、モツタ家の屋敷……。

「家庭の皆、破滅に」そう言い足されるかもしれぬ。

に縛られた亡き体、風糸のように張り詰めたもの、
せり上がる水の底から浮かび上がる

口々、

泡、

コイ科魚の巣作り用の柴の束となった脚。

黴に充ち、廃棄すべき家々。

埃の飾りが振り、放置された家並み。

剥がれた幅木。

壁上には氾濫の影が刷られ、消えた子供たちの丈が測られる。

まっすぐ立った背中。蒸発した背中。

子供部屋、
敷布、
枕、
人形、
タブレット、
鉄道模型。

(クチズサム)

春は二重に 卷いた帯

三重に巻いても 余る秋

昔々、おばあさんたちのおばあさんたちが歌った――

見えぬ心を 照らしておくれ

ひとりぼっちに しないでおくれ

いったい誰のために歌っていたのかい。

誰もいない、氾濫した村に。

口を利くのは、軋む垂木

衝撃を暗記した窓

釘。

ただし窓は叫びながら、記憶を巻き戻していく。

(コダマ)

ひとりぼっちに しないでおくれ

ならば、言葉を巻き直し、もう再び着手するほかはない。

其の四

翌朝、私は谷底平野へと降りていく。

聖別を解除された教会の脇、

アリアーテへと続く大階段を下り、

川の曲がり角へ――

そこには「メタルカルプ」工場の跡地が。
コンクリートの骸骨、

排水管、

ハロゲンラン

プ、

ヨウキヅタが蔓る壁。

すでにかつての工場を治める廃棄、

無生物、

芽の首の

腐敗。

「魚たちは？」と私は思い——「電柱の先端まで届いた水位には魚たちが遊泳し、この流れに刻まれた地名の上を漂い、歩道となった水たまりで跳ね回っていたのだろうか。」

泥は潤沢で、乾燥の適度。

マウロ氏の顔も又、乾燥の適度（死後硬直）——

戸棚の下で見つけた彼は、救出が遅れたせい。

「夜ながらも、うちらを助けに来てくれたのよ」とルイーザ婦人は断言する。

「お陰様で。だって、うちの母はね、歩けなかったもん。うちらは市立小学校の体育館に運ばれたわ。」

消防士たちは、

その間にも、

避難させ、

支援し、

撤去し、

指示を出し、

復旧し、

水に引っ張っていかれたピアノで

一曲奏でながら

すでに災厄で

大げさに嘆く人々を慰めた、

排水ポンプを運び、

作動させ、

汲み出して、

そしてタンク車でよそに持ち出した。

水が粛清した後の残存物には、

溝もあり、

凹凸もあった。

それは永く水に浸けられた手指の

皸のように、——あゝ、村そのものゝ皸よ！

「チガロット」(大きなビー玉ごとき、すなわち腹の膨らみから)あるいは「カチャバル」(妄りに喋る者から)とあだ名づけられたエツトレ氏は、こう言いふらしていた。そのうちヘリがやってきて、どこでも消石灰を撒くだろうさ、瓦礫を固めて運びやすくして、病気を消毒して、浄化するってな。ピエスプレット(小さなシラミ)でいっぱいになった鶏小屋みたいにさ、ちようど、春ごとに鶏小屋に消石灰を撒くみたいに、とのことである。

パネルの上に、割れた瓦の上に、

そしてうなじの上に——散らばり

散らばった消石灰。

まどろみに咳をする

泉空夜

マシナリーのまどろみが、とろりと轟いて、常闇が自ら滅びていく、明滅。まじないをまろやかに朗読する老婆は、渦の過多が夕空を嘘みたいに染め上げていく、明滅。の真ん中でナハハと笑う。

約束をそつと届けようとしたが、今日はうとうとと、当然のように、心臓が動く。

羅針盤が死んだのは、楽しかった過去をとうとうかき消して、機械を受け入れたからですか。

湾岸の岸辺の砂浜の、まだ生きるべき足跡が、わずかに湿り、理想のあなたの足の形を、一瞬間でもとどめているのが。

赤茶けた喉の、粘膜が、くまなく侵食され、蛆に躡り寄られ、しかし歌声の空蟬を、一細胞でもとどめているのが。

いみじくも、ふやけた視界の、清涼なる吐き気の、揺られた各駅停車の、連れられてきた祭囃子の、連れ添って歩いた通学路の、必ず忘れると知っている日々に染み込んでいく。

鬱蒼と。風。悪魔が笑うように、森が仄かにざわめく。老婆の微笑。雷が世界を裂き、鳥居が燃える。

延々と続く蒼い空を、教室にぼっかりと空いた窓から眺めていた。天井の高さと比べ、手を伸ばす口実は、くもが見ゆるだけ。

踊る時の足の、動かし方を真似て、水たまりに映った空色を、するりと長靴の作る波紋で繰り、そして広げ、昨日の大雨のあっけない残り香を探す人が、どこかにいる。

身体がララバイにひたさされて、空色に透き通っていく。

きつと、目を開いて。凍てつく輪郭が確実に硬さを刻み込み、が栗立つ。黒黒と黒子から太い一本の毛。掻き毟り、皮膚が破れ、爪に挟まった細胞、皮膚片、肉片、血の染みる、粟が、ぷつぷつと。

煙。粒子が肺の奥の群生して実った肺胞に引っかかり、眼球の上にもぷつぷつと斑点を作り、鼻の奥の花粉と結びつき、弾ける。

紺色の空が目染みて、星々のバラバラの散らばりを見て、満月が空に白い穴をきつぱりと貼り付けるのを知った。

ざっくりと、ひび割れた、あかぎれた、皿を洗う、水の冷たさ。

診断書がだんだんと、端より燃える赤いひだの侵食とともに煤へとちりちりと、じりじりと。

寸断された祭壇の木の切れ端が、しなだれるのなら、細く長い蠟燭の白いどろりとした伝い落ちる熱のねばつき。

セダンに乗っていた祖父のその笑みの見出せるセルロイド写真。白いとろりとした線香の煙の上昇。焼香。天井を越えて。

空を断罪するようにぎりぎり張られた電線が裁断する。

例えば、世界の終わり。

地球がごとく凍り、真っ白の輪郭が黒黒とした宇宙にはっきりと穴を浮かべ、あるいは宇宙全てが凍りつき始め、凍えた白いひだがちりちりと真空を侵食し、音のない真っ白の夜が訪れる。温度のない雪がゆらゆらと降り、都市を沈め、冷え切った世界。映画館に籠もり、古いSF映画が描き出す未来の2019年の白と黒の明滅、が観客の顔を照らす。

月が堕ちて、裏側に住む兎たちのひしめく住居のごつごつとした開口部が毛穴のように見える岩石。砕いて砂時計に詰め込む、落ちることはない。

手が触れた男女が、あるいは手を触れ合った男女が、静寂の中、やがて、ミルクの白に染まった月の満ち欠けを語り、やがて、手を繋ぎ、やがてぎゅつと、曖昧に溶けて、そつと、笑い、ながら。白と黒の、スクリーンの中で。

問う。

何が空を覆うのか。プラネタリウムの偽物の囲われた空に映し出された、燃えて、さかる、彼岸花。

虹が透けて、レイリー散乱の青が、黒い宇宙を覆い、太陽の白い光が、とびとびの、光の波の、揺れる。

濡れた、私の足首より先。膝より下。下半身。ねばついた海水の、揺れる。ふらつきながら舌尖に感じたしょっぱさは、飛沫か涙か海水か。空の青が海に溶けていくように、私の体液も海と混じり合っていていけるでしょうか。酔っ払いが口にした一夜限りの詩の言葉が、月の光に溶けていくでしょうか。

粘土から滲む油。洗い落とせないぬるぬるとした指先の、ささくれた、爪との境界に沈着した。フローリングに飛んだ油が足裏をぺたぺたと。でんぷんのりのたっぷりと指先ですくった、塗られてしわしわとふやけた紙。ぼこぼこと触れた指先の、一本一本の指の違いの、十本の区別できなさ。喉に触れた剃刀の冷ややかさ。

歯がぐらぐらと揺れて、沁みて、爪楊枝を歯と歯の隙間の歯肉に生け花のように突き刺し、泥団子をしゃくりと喰む。唾液が泥と混じり、じゃりじゃりと歯を研磨し、舌の上に錠剤のようにしょっぱい小石。水で呑み下す。引き裂かれた心臓がマルゲリータピザのチーズが伸びるように、肉片を滴らせながら赤黒く、ぼとぼとぼと、と。

風鈴の音。

ヘリコプターのバラバラと回る翼。近づき離れ、離れては近づき、バラバラと花束が風に揺れ、あたたかなさわやかな墓場。なかなか泣かなかった幼かった別れ。鮮やかな青空。姿の見えない鳥のピピピと啼く。

微笑み、母の頬に彫られた、あばたか、えくぼ。りんの透き通った金属音が、畳へと沁み入る。呼吸の静かな音。まばたきのこすれる音。静寂を割る、咳。マシンナリーのカチ・カチ・カチと、繰り返す、カチ・カチ・カチと、シャト

ルランの音階の低いドの響きが腹の奥に沁み、荒い呼吸の音。時計が切り刻む、カチ・カチ・カチと、耳鳴りのように消えることも広がることもなく、水滴がシンクを叩く、ぽつ・ぽつと。

見捨てられた地蔵の頭を穿つ雨垂れ。誰も訪れない静謐な診療所にかかる讚美歌。瓶詰めになった誤謬ばかりの歌詞。バラバラと、遠くで語る。

紫の花びらを押し潰し、腕の血管を上からそっと色付けて、浮かび上がる幾何学模様。まじないを小さく口にし、ひりひりと皮膚に染み込む。

目、くるめく、万華鏡の鏡を部屋中に敷き詰め、つぶつぶの宝石のような銀河、壁に寝そべって、重力を聴く。揺れるたびに世界の彩りは一変し、極彩色のタイムラプス。視神経がハープのように奏でられる。夕焼けの、レモンの、夏の入道雲の、生い茂る、蜜柑の、赤ワインの、ピンクの象の。

網膜に写る、昔話のような、童話のような、完璧な形の林檎をツルツルと、しゃくりと喰む。一色の赤から、黄色の果汁が弾けて、ぼとぼとぼと、とワイシャツを汚し。

やがて日は落ちゆき、夕日を浴びた街に、メランコリックな音楽があちこちから流れ、銘々が今日の終わりを告げようと競い合い、人々の耳に注ぎ込むうと。

ゆらゆらと揺れる電線の影が、大縄跳びのように足元を掬う怪物の影となる。太く、細く、異形が街灯に照らされて落とした影のように。

夜の闇は電線を呑み、宇宙を呑み、明滅する街灯の、誘われた蛾の、頼りない羽ばたきの作る、風とも言えない空気のまどろみ。私の吐く息。

螺旋階段から見上げた火星の赤さ。バーコードのような柵に囲われて、ひんやりとした金属を掴み、牢獄を思い、スマホを取り落とさないように。混濁した、コンタクトレンズの、泥濘の。

理想のために死ぬのですと兵士がうそぶくのを聞いた。あれは夢の中だった

のだろうか。テレビの中だったのだろうか。ニュースかアニメか。聞き流されて、震える文字列の、ぼろぼろと崩れ落ちていく、金属の細い活字の、棚に収まった、ぼろぼろと落下した、喉の奥に引っかかった、言葉にならなかった、微笑みの、寂しさに嘆いて、ゆるやかななめらかな清廉さの中に還りたいと願っている。

留守の家のベランダに揺れる洗濯物。物干し竿にこびりついた水垢。下の名前を、本名を、ふと呼ばれる。夏空の下、あるいはダンスクラブのフロアの、人々の行き交う、流れの中洲にて。鈍い頭痛を晴らしてくれる肉食獣の唾液混じりの囁き。車道の向こう側の通行人。

列を成して、木漏れ日の下、少女たちは、バスを待つ。永劫の待ち時間をも、待ち続け得ると、けらけらと笑う、ふさわしい光景、計算された、打ち捨てられた、無遠慮。遊び疲れた、幼児の、寝息。すべての純粹さをミキサーにかけて、泡立つ罪、海の中に混じっていったはずの私の涙が、ブレードに絡め取られて、塩の結晶となり、砕かれることなく、歯車の隙間を埋め、ガ・ガ・ガと、ブレードの回転は止む。

蠟燭はついに短くなった鉛筆のように、ぐずぐずと溶け落ちて、ねばついた熱もさらさらとなり、炎は明滅するように息絶えようとする。パツキリと割れる、機会をも逃して、もはや全てを泥へと溶かしゆくしか仕方がないでしょうから。粘性があるから、魂をもスライムに浮く水晶のように。ただ滲み、歪み、ほがらかな、ささやかな、まどろみ、灰色の、筆洗バケツの中のマーブルの、明滅する瞬きの視界の、落ち落ちて、川のせせらぎの、ゆるやかな……。

わからない。

カットインした閃光。雷が空を裂く。咯血、鮮やかな赤に見放されて。

余分な愛はない。

騙されてもいいと。

伶俐な子供が言う。

そよ風が吹く、くるくると回るかざぐるまに、くらくらと叫ぶあざけりに、湾曲したスプーンに反射した世界は凝縮し、あの日見た映画のたったワンシーンの、ワンフレーズの、俳優の頬の黒子の、古傷の凹凸の、カチ・カチ・カチと、数取機を押し続ける。夢中で、枯れた声で。尽くされた人生の亡骸を眺めて、そっと笑う。

眠りたかったら眠ってください。

名前も知らない老婆が優しく抱擁し、

ララバイが沁みるから。

無数の光の粒がキラキラと虹色になって、海になれなかった涙の代わりに視界を覆う。チカチカと。

あさ・ひる・よる・語る

佐藤菜琴

破壊音

息

創造的転回

湯気

天気予報

禿の独り言

冷えたコンソメスープ

の後ろ

「ラッキーアイテムは黄色のクレヨン！ 今日もいい日になりますように！」

助詞の使い方の方に気をつけたほうがいいと思うのは僕だけですかね。いい日を
生きているのは観葉植物のフィカスベンガレンシスだけです。表土が乾いた
らたっぷりと、水をあげましょう。眩しいので、何度か親を殴って天窓に黒
いカーテンをつけてもらいました。黒いのは寂しいからと、彼らは一筆書き
の白い星が描かれたものを選びました。無駄です。燃え盛って消える星に、
希望などありませんから。

空気清浄機

ぬいぐるみの四つ穴ボタン

光化学スモッグ注意報が発令されています

だるま浮きの幼体

シーツの皺

やんごとなき妄想

埃
の行方

「また会いに来るから。先生は待ってるぞ」

先生の趣味はパパになることです。血色が悪くてふくらはぎが細い女の人と遊んだ翌日、僕にティーエイチの発音を教えたときの、その舌と歯の間から噴き出した唾が少し輝いていました。さっき、机に置いたコップに水を注ぎ、氷を乗せました。でかい氷がいつまでも水の上でふんぞり返っているのを見ると、権力が恐ろしくなります。氷の密度が水のそれより小さいから、なんて理由で済ませていいものなのでしょうか。

通勤特急

ただいまは聞こえない

オルゴールの蛍の光

液晶画面

雑踏

シャッター

ニッポン放送木更津送信所

の彼方

「母さん、育て方間違えちゃったかなあ」

間違いとは何でしょうか。間違った、ただそれだけのことです。今イヤホンをつけました。最大音量で聴く二胡の音は暴力をともなって生きています。水を飲み干した僕と、僕以外の人間と、同じだよ。二胡は僕の東京の鼓膜を突き抜けて、シルクロードをなぞって、名のない星の鼓膜へと届きます。あと朝から気になっているのですが、瞼の裏を黄色のクレヨンで塗ったら、世界はちよっぴりバターになるのでしょうか。これは間違った問い、ですね。

*Hey bro, still dancing with your shadow named Depression? I know you're
holding yourself in silence.*

たったひとつのお願いがあります

病める者には病めるときに語らせてください

しかくい海

洸

みんな、かなしくてあたたかい海をもっている

チヨキチヨキチヨキチヨキ

みんな海を切りつけて波は荒い

チヨキチヨキチヨキチヨキ

わたしの海はこわれやすい

チヨキチヨキチヨキチヨキ

ことばも都合よく立体になる

チヨキチヨキチヨキチヨキ

わたしを優しく傷つけて、しかくい海にする

チヨキチヨキチヨキチヨキ

わたしの海をあなたは見過ごしてはくれない

チヨキチヨキチヨキチヨキ

あなたの海でひかりが泳いでいるのをみた、あの夜

チチチチヨチヨチヨ、チヨキ

その裂けて壊れた海を、そっと撫でて抱きしめた

春眠、就活を覚えぬ

鬼木元子

お母さんが作った大根サラダの仕上げに涙を

(それはそれは大粒の涙を)

さよなら文春

デスクトップからワンクリックでわたしを祀る神社へ

あ、こめかみのニキビと乳化リンスは怪しい関係らしい
本を手にとるとまず出版社を確認するクセがつかまりました

(もういらぬのに)

まぶたの開かない朝

はじめて独り占めしたポップコーン

(「私の強みは……」)

手放さないわたしだけのマイク

(「本日は貴重なお時間をいただき……」)

増えて減らないやりたいことリスト

GWの大手町はゴーストタウン

そして、世界に一人だけのわたし

業務用エレベーターの唸り声 ピーコとNHKニュース 黒い指先

文字しか知らないあの人の声は、わたしにしか聞こえない

冬が明けてイチゴの足は早くなった

男を追ったあの山姥を追って

くもりのちははれ わたしの、はる

問い

斉藤 洸星

それは問いだよ、と少年は言ってくれた。

石は夢を見ていて

森は頬を赤らめて

砂漠は 何もすることはできない もどかしい

空は疲れをにじませるけど

星は嘘をついても瞬いて

塵の雲は 雨を恥じる

大地は、ただ、振り落とされたくないだけ

それでも

夜の話をしよう

無限遠方にとる 短い夜の話

その終端まで向かえば

荒々しく退屈な眺めが 絵を隠していても

火を盗んでも

人を踊らす

人々の絵

真っ黒な絵

人々は踊り揺れる 揺れ踊る

星にぶつかってでも 踊り揺れる 揺れ踊る

昔からそう

そこに逃げ出そう そうすればきつと

余分な次元があふれたら

蝶も羽ばたける隙間がある

光の粒を捌けたら
まばゆい魂の密度がある
純粋な表面 骸が落ちれば
卵が割れることも
常夜灯が消えることもない
無言の対話 星々 不意にともされる瞳
思えばそこから始まった
音の汀 打ち寄せる沈黙は
百億あれば足りてしまう
地平は老いる
祭主はいない
その日々にだけ
愉快な問い
距離が出会った それでも引き金を引いた
罫が輝きだす
絵が浮かび上がる
短い夜 一步前の無限まで
僕たちは間に合う

明昨の境

松村歩

夜は暗し

思考だけが冴えて上映会は終わらない

おやつの時間の裏側

示し合わせて黙るひとたち

静けさが命を殺す

うるさいので黙ってください

朝になったら何をしよう

なんか、君に電話をしたいかもしれない

パケット越しでも聞こえるざらついた mp3 に

僕の今日の最後が

君の今日のはじめになるように

昨日の夜の僕と明日の朝の君で

夜闇と朝霧の間

見えない世界を歩きませんか？

手を繋がなくとも

ぬくもりなんてなかったよ

不在が在るなら

それだけじゃ足りませんか

君と僕の間は夜のカラオケ、朝のネカフェの一室、それか行間が一行と少し

ずっと近い 近いから

痛い準備動作で手が届かない

いつそのこと知らないまままでいてくれますように

僕は暗闇で君は朝霧

君が暗闇で僕が朝霧

多分どっちでも

ううん、どうでもいい

夜も朝も消えちゃえ

全部混ざってなにもかもなくなれ

何卒よろしくお願いいたします。

君の朝が暗いことを切に願う者より

愛と砂糖と子犬の尻尾とそれからそれから etc.

鯨・夏・ともすれば山手線

ジョーンズ大翔

という詩をわたしは書いたのです
夏に。

蟬

太陽

Tシャツ

あるいは花火は捨てました

わたしのたましいは

ひたひたに浸された記憶ですゆえ

わたしはその日鯨を殺したのではない

わたしは

窓の外を見つめる

あなたの

微笑みの丘の朱色や

言葉のための番いの蕾から

懐かしさを忘れた痛みが

空になりたいと願う砂丘が

あなたの瞳へ

群青を浸し

それを隠し

あるいはまどろみながら

たゆたう睫毛の愛おしかったことを

ささやかな許しを

ひそやかに抱きしめることしかできず

あなたへ
祈れますように

そのたびに夏が
わたしたちを忘れられますように

「カフェオレとカフェラテの違いは何でしょう」

紙芝居のような空間

夏の白い太陽のひかりが

車窓を抜け

山手線の

少女が読む小説を包み

あるいはそれをまばゆくし

わたしのまなざしと永遠とを飲み込みながら

あなたの白いワンピースを

より一層切なくしながら

約束とは言えぬほどの

ひらひらの切手となって

ワンピースの奥の

小さな肩の先の

あなたのようなじの

透き通った産毛を縫って

地へ地へ降ろうと

ひっそりと流れる

一雫の汗へ

まだ

銀河を贈っているのです

がーしゅういんの時間

北久保七海

これから六時間はあつという間に溶けていく
がー、しゅういん

印刷機が動いて熱を帯びていく、上に置いていたペットボトルから水滴が滑り落ちる。そして熱を帯びた紙、を運ぶわたし、も忙しく動く。(熱の連鎖ははじまる。) きつく結んだはずの靴ひもがほどける。髪の毛が首に張り付く、のを認識する(のはもう少し先のこと)。

パソコンにつないである卓上扇風機、の接触が悪くなる。ときどき止まっても角度を変えればまた動きはじめた。今日は電源コードを手にもって固定しないと動かない(けど次の週に見たら普通に動いていたりもする)。意外と進んでいるようで進んでいなかったり、戻ったりしているものなのかもしれない。

(他に話そうとしていたことを思い出すとき、砂時計の中身がすべて落ち切るうとしていている。青い砂、が落ちるのを見つめる、砂と砂が静かにせめぎあう。)

見えないものをどうして見ようとするのか

(花火が一発

散るまでに何歩か進んでみる)

印刷機が動く、紙が出てくる

がー、しゅういん、がー、しゅういん、

(この印刷機はレのフラットでチューニングされているけど、
上のフロアの大きな複合機はミのフラットだった)

がーしゅういん、がーしゅういん、がーしゅういん……

止まらないね

佳境、音の連鎖がはじまる

アツチエレランドで、フォルティシモで！

いつからここはオーケストラだったのか

見えない指揮者が動かしている、がーしゅういんの時間

なにもかも転げ落ちるようにどんどん溶かされていく

或る渦

高橋一翔

あゝ あなたは渦の中

電子が蛇のように体を拗らせ箱に潜り込み

ひと針の振動がただ連鎖するとき

出会いの賛美と故郷の棄却へと

僻地にあつて、中心にいた

端から端まで くるくる

「詩よりもバイブスの方が重要かな」

それから何度も寝ては起きて、あの部屋を過去にした

この部屋ではあなたは紙の上のインク

今や響くのは音楽だけじゃない

—— スタッカートや舌打ちや思惑、そして笑顔！

夕食後の暗がりまでおあずけした円盤

別の場所、別の時間、手にした別の円盤

永遠ではある

けど単調ではない

あゝ あなたは渦の中

目眩が猫のように瞼に取り憑き

白い箱の中にただ体を委ねたとき

出会ったことは意図と秩序の賜物だと
今際にあつて、涙はこぼれた
恥じらいも溶けるまで　くるくる

「銀座、行った、行った」

それから超人的な舞を画面の中に認めた
覗き見たのは出番を待つ間にこそ築かれる平和
敵は本当は敵じゃない

——倒立や足踏みや見栄、そして回転！

私に地球儀を遣して結束

順番だからと慰め合う無意味な生の結束

永遠ではある

けど景色は変わる

あゝ　あなたは渦の中

車輪が鮫のように迷いなく地を這い
体に乗せた箱が絶えずただ交差するとき

出会いも詩も受け身だと

地球にあつて、何もなかった

始まったから終わるまで　くるくる

「ここにいてくれて幸せだわ」

それから流したお湯も古の試行も美も糞も循環した
寝返りの彼方にある別の昼

世界はこれだけじゃない

——時代や血縁や映画、そして秘密！

光に晒されて動き出す生物の起源

やるせない悲しみと死に物狂いで掴む喜びの起源

永遠ではある

けどいずれ終わる

ダチヨウと電車

中澤陽

電車のホームに朝顔のつるが伸びる

路線図のカバーが黄色く劣化している

2両編成がゆっくり鉄の板を摩擦させる

誰も電車を降らない

誰も電車に乗らない

若い車掌が時刻を確認しボタンを押す

駅の瓦の破片が落ちてくる

そう近くない近くにある動物園の広告

広告の中のダチヨウだけが生きた目をしている

固い餌を檻に投げられても遠くを見ている目をしている

靴のソールがまくしたてる砂煙の中でも小麦の風を待つ目をしている

君が地球に居ないなら

佐伯実琴

君について考えていたことは、勘違いになりそう
君について感じていたことは、嘘になりそう
これから先はもうずっと
知らない人の似たような話で
上書きされていくだけなら
もう私の手には入らないなら
元から無かったのと一緒に！
なんて、投げやりになっている……
かもね

君の姿を思い出すとき、写真よりも楽しげに見えるのは
君の声を思い出すとき、探せば今も近くに居る気がするの
私が君のXXだからかな
私はそれだけに縋っていたような気がして
他の人が君について話すたびに思う
君に時間をあげて君と言葉を交わして、もっと……
とかね

そういえば
月にも海があって適当に魚が釣れるとかいう、噂
全然信じていなくてすっかり忘れていたけど
今夜から眺めてみようかな
8月に入ってから初めてベランダに出るんだけど
とかぶつぶつ言いながら

君の好きだった夏の空気に触れ、たら
またほっぺが濡れてし、まう、苦しい……
なんてね

どこかに置いてきたものは

いつか取りに行かないといけないでしょ

でも大抵はそのまま消えてしまみたいね

フェスに着けていったヴィンテージのネックレス

夜には消えてたけど

お巡りさんは「身分証であれば」って繰り返してた

だから許すとか、許さないとかじゃなくて

拾った人にどこかで愛されることを願ってる

今度は置いていかれないように大切に

それだけ

地球ごと全部

私のものなんだから

もし君が

宇宙の溪谷巡りにでも出かけているのなら

私はようやく本当の意味で、君との適切な対人距離をとれたのかもしれない

君は私のもの、ではなかったけど

私は君のものになっても

誰かが通るまでの話し相手にくらい、なってあげても……

いいのね

私たちの音楽

廣瀬日乃

いつもの大衆音楽が落ち着かない 耐えられない不快さを感じる
眠気に耐えながら観た難解な映画はやけに綺麗だったのに

……言葉に責任を持ちたいので言い直させていただきます。

・大衆がカタルシスを感じるために消費する用の商品は気持ちが悪い
耳に流れてくる自分が選んだはずの音楽が陳腐に感じる、チープ
・コーヒーを飲みながら脈絡の飛んだフランス映画を観た、退屈だった
しかし今になって思い返す、ラストシーンが美しかった

……それらしい言葉をてきとうに紡ぐことしかできないならば

私の人生から作詞は削除します。あまりに恥辱的なので。

自分の凡庸さを確認する作業は苦しいので。

今から私の言葉を並べてみます。

エントリーシートを書いた

商業的な文章が妙に上手だった

自分を魅力的な商品と思わせるセールスがうまいだけの虚しい行為

もつと世界の話がしたいのに

ダ・ヴィンチは自然界には輪郭線がないと述べた

あるのは明暗のグラデーションだけ

物質同士は真に一つなのだ

すばらしい世界だ まるで理想郷

すると嫌いなあの女も私の一部なのか？

人が死んでいるニュースを見たい時だけ見て涙を流している（かも）

そう まさに映画を見るかのように

悲劇を娯楽として食い潰さないと言い切れない

本物の地獄で本物の人間が藻掻いているのにね

→安い言葉

言葉が安いのではなく、私自身が安いから言葉が軽くなる

銃弾に肉を削がれた人の雄叫びを

母が 子を失った母の喘ぎを

その場で聞いたら何か変わるか

戦争がライブ会場になるだけだ

私には安息の地があるのだから

本当に我々は同じ世界を生きているのか

私は他者パレスチナ人の一部とは本当か

彼らは地獄を見ている

一方で

残酷の中にあざあざと

恐ろしいほどの美しさを見うる

その美しさを知覚することは私にはできない

私は彼らにとっての樂園のような場所に存在する他の個体なのだ

地獄の中の美しさは文学で擬似体験することしかできない

消費することしかできない

ならお前ムスリムになってガザに住めばって？

断る

私は平和の国の住人だから

傷つけた果てに被爆した国の

旨み成分に生きる侵攻者の子孫だから

本当にごめんない

そういう煉獄で私は生きていきます

ジャン＝リュック・ゴダール *Notre musique* に寄せて

過去の自分から突然渡されたのはマイクとペンでした。痛みを饒舌に語れるようになる。嘘臭さが付きまとった。あんなに強くなりたかったのに強いね。凄いな。立派だね。って言われるようになる。本当に弱かったときの自分を忘れそう。で怖くなった。資格至上主義、学歴至上主義、エリート思想を煽った奴らを絶対に赦さない。「そのままが良い」を否定した奴らを絶対に赦さない。不忍池のホームレス、関内駅のホームレス。生活保護減額違法訴訟。綺麗になった公衆便所と出来立ての排除アート。「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」。教卓で教えることができるのは、生存を脅かされない生活が備わっているから。「ここで学んでいるきみたちはもうエリートですからね」って、まだぼくが取り返せていない左手の薬指を光らせながら、教卓で偉そうに唾を飛ばす弁護士先生。檻の中で首を垂れる上級国民予備軍（その中にちゃんとぼくもいて）。怒って始めた勉強と、太鼓の音が掻き消してくるヘイトスピーチ。「あなたが普段ホームレスの人と会話をしないように、この階層社会では特定の属性の人間とは決して交わらないようにできています」って、そんなの寂しいじゃんか。今まさに交わったのにどうして誰も一緒に怒ってくれないの。黒いネクタイの葬列が通る。泣いている人は誰もいない。その静けさにひどく怯えて言えなかった方の言葉を思い出す。言わなきやいけなかった方の言葉を思い出す。「くだらない」で切り捨て続けて、大きく膨れ上がった「そんなはずじゃなかった」が、存在を思想にしてガス室に連れて行く。いつか絶対にそうなる。いやもうそうなってる。だから赦さない。そういうものだと流されない。人を傷付けない。大事なのは何を言うかではなく何を言わないかだと悟ってから一層寡黙になって。そうやって抗い続けた先が、溜息とぬいぐるみだけの待合室。お薬手帳の落書き、ゾウさん、キリンさん、お母さん、お父さん。また同じ言葉。まさかまさか、もう何も書けない。もう消えてくれ。クローゼットの中に居たことを思い出す。あの暗い部屋で、死んでしまった自分とよく似た男の子に、ふと「あのころのほうがしあわせだった」と言ってしまう。

あして この て こ と
とば いて て
ず っ て こ こ あ
う こ ま あ
い う た かった
って た かった こ ま
あして この て た かった ば
あ た かった

(溶けてしまったあいうえお表を排水溝に流す)

(鍵がかかる前にクローゼットから出なきやいけなくて

(陽の光に出ると「ああここ宇宙ずっと死だった」、

(葉を挟んだら物語を閉じて、

(ただ続くものは何かを

った さい ない 知らない
たかった たかった したかった
い い ご んなさい ご んなさい 知らない
ない ない めんな い めんな わか
んない
か ない か ない か ない 知らない 知らない か
んない かんない かんない 説明したって かんない わかんない わかん
ない かんない かんない かんない かんない かんない 言わな
かったら かんない 誰でも 良いんじゃない 誰かであって 欲しくな
か った そう 思ったのは 一番 誰かを 欲しがる 夜 だった 誰かが増えて 行って 選
な かった ふりを した ごめんね でも あぶない から かくれて ね もう すこ
し だけ まって ね
ちゃんと むかえに いく から まって ね
もう すこし だけ まって ね

また同じ言葉、もう消えてくれ

そのままが良いって言ってあげてください、やっちゃいけないことはいいあっても思っちゃいけないことなんて何一つないって、そのままが良いって言ってあげてください、その性欲が生殖に繋がらなくても、これからも明日のまだ知らない自分に出会えるんだって、それも立派な未来だって、そのままが良いって言ってあげてください、いまあしたにいのちを繋ぐんだって、あしたのじぶんを生むんだって、それも生殖って呼んで良いんだって、それだけで良いって言ってあげてください

また同じ言葉、もう消えてくれ

痛みを饒舌に語れるようになるのと嘘臭さが付きまとった。あんなに強くなりたかったのに強いね凄いな立派だねって言われるようになって、本当に弱かったときの自分を忘れそうで怖くなった。また同じ言葉。でも痛かったの知って欲しかったの。分かんない分かんない分かんない。言わなかったら分かんない。絶対に「それだけで良い」だけで終わらせない。こんなに痛いのに書き切ったなんて言えない。いつか書けるならもうそれでいい。いつか変わるならもうそれでいい。ぼくはずっとぼくの盗作。もう誰にも奪われない

まえがき

2025年7月13日 25:26

残機

菊池亮太

路地裏のおじさんから残機を買った
5個セット、1600円
これで5回まで死ねるならお得だ
おじさんは言った
「雑に扱うなよ」

残機..5

登校中
転がるサッカーボールが視界の端に映る
それを追いかける子供と
スピード違反の乗用車
どうせ死んでも生き返るんだから
助けられるはずだ
子供を庇って乗用車に撥ねられた
燃えるような激痛の中
眠るように意識が落ちる
目を覚ますとそこは教室
催眠術のような日本史の授業中
周囲を見回したら教師に睨まれ
居眠りをしていた罰として廊下に立たされた

残機..4

帰り道

制服を着た男子数人が
同じ制服を着た男子を殴っていた
仲裁に入ると逆上され
ありったけの力で殴られる
どうせ死んでも生き返るんだから
大事にしてやろう
バランスを崩したフリをして
縁石に思いつきり頭をぶつけた
加害者たちの狼狽をBGMに
眠るように意識が落ちる
目を覚ますとそこは自宅の布団
時計を見ると22時過ぎ
夕食を食いそこねてしまった

残機..3

朝食の後

突如激しい腹痛に襲われる
ゴミ箱に捨てたヨーグルトの容器を見ると
消費期限が切れていた
どうせ死んでも生き返るんだから
この痛みから逃れたい
台所まで這って進み
包丁で自らの腹を捌いた
更なる激痛に悶えながら
眠るように意識が落ちる
目を覚ますとそこは自宅のソファ
腹の痛みは既に治まっていた

面倒だったからそのまま学校は休んだ

残機…2

休み時間

友人数人と軽口を叩きあっている

そのうちの一人から「死ね」と言われる

どうせ死んでも生き返るんだから

試しにここで本当に死んでみたら

どんな反応をされるんだろう

二つ返事で了承して

窓を開け迷いなく身を投げる

関係ないクラスメイトの耳を劈くような悲鳴を背に

眠るように意識が落ちる

目を覚ますとそこは保健室のベッド

周囲に誰の姿もなく

友人からの連絡もなし

どうやら生き返っているのではなく

全てなかったことになっているらしい

期待外れだ

残機…1

退屈な授業中

眠気と格闘していると

突如教師から指名される

聞いていないものを答えられるはずがない

どうせ死んでも生き返るんだから

面倒なことはなかったことにしよう

教師からの問いに答えることもなく
自らの舌を噛み切った
素っ頓狂な教師の顔に吹き出しながら
眠るように意識が落ちる
目を覚ますとそこは教室
既に日が暮れ、クラスメイトの姿はない
他の面倒な授業もスキップできてラッキー

残機…0

休日の大通り
クラスで一際目を惹くあの子と
やっとの思いで取り付けた約束
鼻歌交じりに交差点に入る
瞬間、身体に鈍痛
吹き飛んだ先に広がる赤
悲鳴
微かに見えた歩行者信号の赤
すっかり慣れた死の感覚
どうせ死んでも生き返るんだから
何とかなるだろう
すっかり慣れた死の感覚の中
眠るように意識が落ちる

その寸前
思い出す
もう残機はない
もう生き返らない
もうなかったことにはできない

迫り来る

感じたことのなかった

死の恐怖

死の恐怖

死の恐怖！

死にたくない

死にたくない

あんなことに使わなければよかった

薄れゆく意識の中

路地裏のおじさんの声が聞こえた

気がした

「雑に扱うなよ」

ペイル・ブルー・ドット

澤田真志

一枚の写真を見た

淡く、青く、静かに、「」

流れるメロディーを指でなぞりながら

何億光年先を見る

ひとつを忘れながら生きている

ふっと指をさした

「オリオン座」

彼女は今、夜空を歩いている

落ちてしまわぬようにしっかりと手を握った

「ずっと続く」は適度に終わってほしい

赤色巨星はいつかすべてを吸い込んでしまう

数えきれないほどの罪を知る夜空がたまらなく恐ろしい

なあ、ボイジャーよ

今日聞いた「死ね」と昔言われた「死ね」の音

愛されるために、ごくんと飲み込んだ音

優しいを演じたこと

このすべてを運んでおくれ

強く握り返す手が短い夜空の旅の終わりだった

淡く、青く、静かに、卑怯に

私はその点の中にいる

タイムマシーン

葉玉桃子

四十八時間とそれから、それから
またずっと月日が経って
多分一生返信は来ない

あと一〇〇年経ったら
君のこと忘れられるかな
そしたら僕は百二十二、幸せになろうよ
なれないね、ばか

楽になるために手放したのに
今は会おう前よりずっと苦しい
傷つけたくないから
必死で本音隠した
けど

いつの間にか君は遠のいて
気がついたら二人ボロボロ
僕が一番したくなかったこと

一緒にいた時言えなかった
あのこととか
このこととか
いくつも並べて
つぶやいては取り消して
踏みつぶしたら染みになった

幸せの絶頂

思い出すのは未来の記憶

ありもしないこと

どうして本当にしなかったんだろう

言えない、言えないわ

したくないけど君となら、結婚してもいいよ

子供は嫌いだけど君との子ならいいよ

デートはラーメン屋でもいいよ

サトイモの葉の下でもいいよ

一緒に住もう

一緒にいよう

何でもいいから、君とがいいから

旅行先、忘れ物の確認みたいに

通勤中、探す家の鍵みたいに

目で見て、触って、口に出して

確かにそこに君はいなくて

タイムマシーン、

君はもういないと

片目を閉じてても世界の半分が消えることはなかった
瞼に塗ったラメを祝祭だと言う人がいた
すべてのことが起こってほしかったから
眠るたびに死んで目覚めるたびに生まれた
若さを弄んでずっと泣いていた

詩になりたいと思った

精神は永遠なのに身体からは逃れられなかった

身体はただの容れ物なのに痛いと言った

浮腫んだ顔がスマホの暗い液晶に写って

そのたびに再生産される感情があった

私みたいなブリキキュアはいなかった

メンタルヘルスに問題があった

恋人に首を絞められると息ができなくなった

煙草の火が腕に押しつけられることを想像した

どれだけ愛しても口から出る言葉は空気の振動でしかなかった

感情は水のようなという比喻を用いた

私たちは生きあいつこをしていた

誰の妄想の中にも等しく存在しているすべてに絶望した少女みたいな
曖昧だけど何よりも鮮烈な偶像になりたかった
葬儀場で燃えるために生まれた可憐な花になりたかった
つまらないエレジーは嫌いだった

エーテルが何のことかは分からなかった

私だけを選ぶ神様はいなかった

反語でばかり祈っているからいつか天罰がくだるだろうと分かった

いつだって同じ匂いの血がどくどくと巡り続けていた

いのちの使い方を笑われたかった

光の速度で祈っていた

換気

大類環

とんとんとん、と段をなぞる
間違えないようにひとつひとつ
ちゃあんとしっかり見てたどる

広がるスカート
の長い裾に足がもつれて
滑って落っこちないように
腰に布のたばを手繰り寄せたら
一段一段よくみて下りる

たいらなところに降り立てば
ふと音がなくなる
煙草の匂いもざわざわとした声も
すつとひとたびミントが鼻に抜けたら
涼しきだけがみちる
しずかに
ひんやりしずかに涼しさは満ちる

チカチカ光るお店のなかと
しんと放りだされる夜とのあいだ
せり出した屋根の下にわたしはいる

とぷり、と潜れる水と
ふんわり軽い空気のあいだ
プールから息継ぎをする
その瞬間で一時停止したみたいなその接線に

同じように立っていた
きみのその足は
どこから漕いできたの？

私は雪のほうから

話せば長くなってしまうって

どこからどんなふうにしたらいいかなと

考えているだけでふたり夜風で身を冷やしていた

東京にいていま私がここで

少年のごつ、すうっとたのしくゆれる鼻の曲線のこと
なんども盗み見では 空気をばかばか容れていること

20時47分 友だちの誰が当てられるだろう

ただ目を見つめて

太田紗希

ただ目を見つめて

頷いてほしただけ

あなたが瞬きすると心臓が潰れそうで

右眼から涙が出たとき

不揃いが私のからだを健やかに動かしていた

ベンサム、今度は愛について教えて

ただ目を見つめて

同じこと繰り返してほしただけ

季語にもならないものたちを見て

私はきつと若さの真っ只中にいるのだと思った

らが抜かれているかどうかは

嫌いな奴が昨日食べたものと同じくらい心底どうでもいいんだ

ただ目を見つめて

小指束ねてほしただけ

昔より痩せた母の肋骨は

フリルみたいで美しかったの

改宗した人々はみんな涙を流していた

やっぱり愛って難しかった

ただ目を見つめて

笑ってほしただけ

思い出だけで生きていけるようになるまで

もう少し一緒にいさせてね

だから私こうして
ただ目を見つめる

生活2

刈谷美月

ずっと前からそんな気がしてる

街灯、直らない時計、駅のホーム

旅行の最終日に世界が終わればいいと思う

サーブスエリア、光る犬、世界の真ん中で

君と戦争映画を観てみたい、と思った

新宿、交差点、愛について

近くに見えているだけで、本当はずっと遠くにあるのかもしれない

返されないCD、お通しの枝豆、夜風が冷たい

さようならを言わなければ

始まりも無かったことになるかしら